

2021 年度第 3 四半期 決算報告

説明要旨

2022 年 1月31日

【説明会資料】

<https://www.zeon.co.jp/ir/financial/bs/pdf/220131.pdf>

【説明内容】 (取締役執行役員 松浦 一慶)

p. 2 2021 年度 Q3 (第 3 四半期) 総括とセグメントの概況

Q3 連結実績は、前年同期比で増収増益、前期比では減収増益という結果であった。新型コロナウイルスの感染拡大により、調達に軽微な影響はあったものの、生産への影響はない。

エラストマー素材の概況は、主原料価格の高騰に伴い合成ゴム中心に販売価格は一部上昇したが、ラテックス出荷減等との相殺により前期比で売上高は減少、営業利益は増加した。また、コンテナ不足や船繰り難の影響で、欧米向け中心に出荷に一部遅れが発生している。

高機能材料の概況は、高機能樹脂が半導体不足等の影響を受け、出荷量が伸び悩み、前期比で売上高は減少、営業利益は横ばい。高機能ケミカルのうち電池材料は Q4 に向けて回復基調。

p. 3 2021 年度 Q3 の事業環境 (為替・主原料推移)

為替は、前期に比べ US ドルは円安、ユーロは緩やかな円高基調で推移している。

主原料については、国産ナフサ価格は前年同期比で約 2 倍、右肩上がりでも上昇を続けている。アジアブタジエンは Q3 一服感で 736 ドル、前期比で 4 割ほど価格が下落した。

p. 5 2021 年度 Q3 業績サマリー (全体)

売上高 897 億円、対前年同期 108 億円の増収、対前期 22 億円減収

営業利益 115 億円、対前年同期 3 億円の増益、対前期 4 億円減益

経常利益 125 億円、当期純利益 90 億円

以上の結果となった。

p. 6 2021 年度 Q3 業績サマリー (セグメント別)

売上高は、エラストマー素材 490 億円、前年同期比では 59 億円増収、前期比では 11 億円の減収となり、高機能材料 262 億円、対前年同期比で 25 億円増収、前期比では 27 億円の減収であった。

営業利益は、エラストマー素材 51 億円、前年同期比、前期比ともに増益。高機能材料 64 億円、前年同期比で 2 億円の減益だが、前期比度はほぼ横ばいの結果となった。

p. 8 エラストマー素材 概況

ここから 3 ページでエラストマー素材の概要についてご報告する。

左は国産ナフサ価格とエラストマー素材の売上高の推移をお示ししたもののだが、国産ナフサ価格上昇に伴い 2Q まで売上高増加傾向にあったが、Q3 は販売価格の改定が進む一方で、ラテックスの出荷減等と相殺され、売上高は微減となった。

右は 20 年度 Q3 の合成ゴム出荷量を 100 とした場合の出荷量の推移を四半期毎の指数を棒グラフでお示ししている。Q3 の出荷量は、Q1、Q2 とほぼ同量の推移を示している。前期に引き続きコンテナ不足、船

繰り難の影響を受けた。

p. 9 エラストマー素材 P/L

出荷量については、コンテナ不足等によりエラストマー全体で前年同期比 4%の出荷量減となった。一方で、SBU 毎に見ると、合成ゴムはほぼ横ばいで推移しているのに対し、ラテックスは前年同期比で 20%ほど出荷量が落ち、前期比でも 17%の出荷量減となった。

売上高は 55 億円、前期比で 13 億円の減収。ラテックスが一番大きくマイナスに効いた。

営業利益は 51 億円、前期比で 3 億円の増益。

p. 10 エラストマー素材 営業利益差異 (QoQ)

営業利益 3 億円増益の差異分析について、化成品等の出荷量増により 3 億円増、ラテックスの価格鎮静化で 2 億円のマイナス方向。原価差 8 億円良化方向に効いた要因は 2 つあり、水島工場の生産増に伴う固定費の増と上期末に発生した棚卸資産処分損等が少なかったこと。海上運賃上昇等は顕著であり、11 億円程悪化に効いた。主として合成ゴムと化成品が要因となっている。

p. 11 エラストマー素材事業 要因別 営業利益差異 (YoY 累計)

こちらは 3Q までの累計を年度で比較したものである。

海上運賃上昇等で累計では 56 億円の悪化。原料はナフサを中心に 184 億円悪化傾向にあった。足して 240 億円程の悪化要因があったが、販売価格の改定をさせていただき、出荷量を増やすことで、結果 106 億円累計で増加した。

p. 13 高機能材料の P/L

ここから高機能材料セグメントについてご説明する。

売上高は、高機能樹脂はスマホ、タブレット向けが半導体不足の影響を受け、出荷量が減少。高機能ケミカルは、トナーがコロナの影響を受けお客様の稼働率が一部下がったことに加えて、当社からの出荷を一部 Q2 に先行出荷した影響で減少している。その結果、高機能樹脂は前期比で売上高 20 億円減少、前年同期比では増加している。高機能ケミカルは前期比ではトナーの影響で 7 億円減少しているが、前年同期比では電池材料中心に 21 億円増加した。

営業利益はほぼ横ばいであった。理由については、次のページでご説明する。

p. 14 高機能材料 営業利益差異 (QoQ)

数量は、光学フィルムが半導体の影響を受けて中小型向けの出荷が落ちている。トナーはご説明申し上げた通りの理由で出荷が落ち、13 億円ほど悪化方向、販管費差は 10 億円良化方向に効いている。上期末に光学フィルムの試作費用等が発生したとのご説明をさせていただいたが、当 Q3 においては発生が無かったことで 10 億円良化した。足して QoQ で横ばいとなった。

p. 15 高機能材料 営業利益差異 (YoY 累計)

数量増によるものは、光学樹脂、電池材料等が出荷増で 31 億円の良化。原価は生産量増に伴う製造固定費減と特に光学フィルムはコスト低減活動を実施しており、その分を一部含み 18 億円良化した。

p. 16 電池材料の状況 (出荷量)

ここから高機能材料事業の主要 SBU 電池材料、光学樹脂、光学フィルムの出荷量についてご報告する。

EV 向けは対前年同期、対前年とも堅調に推移している。Q3 までの累計の出荷量は 180%弱と EV 向けは出荷量を伸ばしている。

民生他向けは、半導体不足の影響もあり、モバイル端末向けに一服感が見られる。前年同期比では96%、全体では150%弱の出荷量の伸びが見られる。

p. 17 光学樹脂の状況（出荷量）

光学樹脂の状況は、特に光学用途向けが半導体不足によりスマホの需要鈍化、当社の直接のお客様であるレンズユニットメーカーの一部で在庫調整があり、当社からの出荷が減ったことで前年同期比、前期比とも減少している。ただ、累計では120%で堅調に推移していると当社は見ている。

医療向けは前期並み、YoY累計で見ても102%と安定して成長を続けている。

p. 18 光学フィルムの状況（出荷量）

中小型向けがQ3は78%であり、前期比では特にモバイル端末向けは半導体不足の影響で出荷が大きく減った。YoY累計では96%。

大型向け（TV向け）は、対前年、対前期とも並み。YoY累計は108%と成長が見られる。光学フィルム全体としては対累計比105%の出荷量を記録している。

p. 20 B/S 概要

ここからは、財務状況についてご報告させていただく。

貸借対照表の概要。流動資産で棚卸資産が増加しているのは、来年度に予定されている主力の合成ゴム工場が定期検査に向けての在庫の積み増しをカウントし始めているからである。

p. 21 C/F 概要

営業キャッシュフローは351億円、投資キャッシュフローが▲153億円、フリーキャッシュフローが198億円となった。

p. 22 2021年度下期事業環境 エラストマー素材

こちらの表の見方は、Q3の矢印は昨年10/29予想に対してQ3がどのように推移したかを矢印でお示ししている。Q4については、本日1月31日時点で迎えるQ4の主力SBUの動静がどうなるかについて見立てたものである。

Q3実績は、全体として上振れ、売上高490億円、営業利益51億円。Q4見通しは、合成ゴムがコンテナ次第となる部分も一部あるも出荷増を見込んでおり、売上高は増加。一方で期末に費用が発生することが見込まれており、営業利益は合成ゴムがマイナス方向に振れる見込み。ラテックスはQ3上向きの矢印だが、予想に対し大きく下振れはしなかったというのが実態である。一方でQ4に関しては、数量の結果もお示したように、流通在庫の滞留で価格の鎮静化が進むだろうと、下向きの矢印の見立てをさせていただいている。

p. 23 2021年度下期事業環境 高機能材料

こちらも同様の見立ての高機能材料セグメントである。

光学樹脂のスマホ向けが一部伸び悩むも、医療他用途向けでQ4出荷増を見込んでいる。

光学フィルムは、モバイル向けがQ3低調だったが、Q4にかけてもやや影響を引きずる。また、試作費発生が見込まれており、営業利益も下振れ方向と見ている。

電池材料は、Q3、Q4にかけて回復基調にあり、売上も営業利益も伸びていくと見立てている。

これを受け、2021年度下期業績予想を修正させていただく。

p. 24 2021 年度下期業績予想修正

売上高については、お示ししている通り、エラストマー素材 160 億円の上振れ、高機能材料は 89 億円の上振れとなり、合計で売上高 1,839 億円、299 億円の上振れとなる。

営業利益については、エラストマー素材 85 億円で 29 億円の上振れ、高機能材料 123 億円で 5 億円の上振れ見込みで、トータル 205 億円で修正させていただく。下期の事業環境、為替等については、下のテキストボックスに記載の通り。

通期売上高は 3,630 億円、営業利益 455 億円を予想。

p. 25 2021 年度配当金予想修正

Q3 の業績結果と Q4 の見込みを受け、21 年度期末の配当金予想を修正させていただく。前回は 12 円に一旦据え置くとして説明をさせていただいたが、これを 15 円に修正させていただく。その結果、年間配当予想は 28 円に修正（対前年度+6 円）する。なお、当社配当金の方針は、安定的に持続的な配当政策を継続する方針に変更のないことを申し添える。

以上